

〈政策研究交流集会へむけて〉 協同で地域をつくり仕事をおこす

## 《第4分科会》地域から教育・文化の協同の可能性をさぐる

菊池 陽子 (生活文化・地域協同研究会埼玉事務局長)

### ①協同の必然性を認識しないと

そもそも「協同」は、どうしようもない、せっぱつまった状況から出現する。

なぜなら、力をあわせてやるしかないからだ。

今、教育や文化というこのジャンルに、せっぱつまった感があるのか、ないのか。

少くとも学齢期子ども達のおかれた状況をこれで大満足と思っている人はごく稀な事だろう。それらは昨年行われた「いま協同を問う'92全国集会、でも、「高校中退者12万人……」とか、「公的補助のない中での共同保育所……」とか、「農家の後継者難……」「生きる力をたくわえない大学生や高校生……」などなどの問題が出された事でもわかる通りである。また、文化をとりまく状況も、大衆が権利として文化を享受する幅はかぎられており、商品としての文化は貧富の差がもろにはねかえってくる。

一方、働きすぎの日本のおとな達はリフレッシュ休暇などと言われ、レールのひかれたカルチャーコースや、福祉ボランティアへ足を向ける。これがまた恰好の商品消費者とならされている。

私たちは生産（農業協同組合）や消費（生活協同組合）の場で先駆的に協同組合を創り出し、今、社会的認知を受け、その活動は多岐にわたっている。

しかし、「協同組合方式がいいらしいから……」とか「海外で成功の例があるらしいから……」で上から下へ落下傘式に「組合」づくりを急ごうとしてはいまいか。これだと遠からず失敗するのはとの恐れを感じずにはいられない。なぜなら、そう思いついた者のみが、設立時の真正直なエネルギーの力をかりて一見成功したかのように見せ、一時的にふくらむ富を集中し、その事業拡大のために働く者が雇われ、きわめて資本主義的な

企業として発展し、それはもはや協同組合でも何でもない、欲得の私企業、一部に私物化された事業になってゆく道すじをたどるものだからである。

しかし、本当に何とかしなくてはならない状況を認識（学習の中で）するならば、人は力を合せないわけではない。それが本能のはずだから。

しかし今、これを阻害する教育が文化がそじてけたたましい宣伝が巧妙に放出されている。それらと毅然と戦い、人間の本来性をとりもどす為の主体の形成がなされる過程にこそ、人は喜びを感じ、連帯の中で自己実現の道すじをすすめる能力を発揮するのではなからうか。そして『自立と協同と愛』の人間像が持続的に追求され続けるむずかしさは経験中であり、この分科会のもつ役割は大きく期待されている。

### ②今回の集会の意味となかみは

さて、今回実践報告を願うのは、「地域から協同のネットワークを」と題して、埼玉県北部で活動を広げる会員の新井千明さん。消費生協をはじめ、産直運動の中での生産者の協同、文化活動など地域を見た時に潜在的な要求を掘りおこしてきた人。だいたいだなどと思った事は本気でやる事、組織的にやる事と言いきり、そんな中でリーダーシップ力の重要さを問題提起してくれるだろう。またそこからませて、今一番とらえづらいとされている青年層の心が結びあわされていく実践を高知県高校生平和ゼミナールの指導者山下正寿さんから。また、ベーク報告連続シンポでお話いただいた名古屋の後房雄さんに、共同保育所を中心とした協同のいとなみ「子育てコープ」と名古屋地域のつながり。またとかく地域の視点がなやみという事業団の「病院で死ぬということ」のとりくみの中で目からウロコが落ちたという話などなどを



かこみ、大討論を展開しようではないか。

### ③地域にねざす協同とは

すでにおわりの通り、今年この教育・文化のジャンルの協同が、地域づくりとどうかかわっていくのかに焦点をあててみたいと考えている。

「地域に根ざす」教育という言葉は、たんに下からの、あるいは草の根からの、ということの意味することに止まるものではなく、まさに内発的なものとしての教育がその場において組み立てられつつあるということを含んでいるように思う。文化的ニーズを充足する手段としての文化的消費が拡大化し、文化産業の隆盛の中で受手としての客体だけでよいのかどうか、いやそれとも、地域的土壌のうえに地域文化の創り手としての主体を確立する時がきているのだ。今、バブル崩壊という時期にこそ各地の実践を交流しあい、協同の力をたくわえていかなければならないのではないだろうか。

そして、地域にねざし、多様なネットワークを宝としつつ、協同のいとなみを創りあう上で

- ① その思いを、その土地土地でどう結びあわせたのか。また、それをとりまく社会背景はどうだったのか。(構成員の主体形成論)
- ② その土地にどうなじみ、根ざすことができたのか、またはできるのか。(地域づくり)
- ③ 経営的にはどんな苦労があったのか、またはあるのか。(経営論)
- ④ 「協同」を願う他の集団との結びあいはどうだったのか、どうあればいいのか。(協同(組合)セクター論)
- ⑤ その時研究者のはたした役割は、はたすべき役割は……。 (研究的側面との関係)

などを討論の柱としてはどうだろうか。

### ④思いをもつ人の内なる質を

#### 高めるために

さて、今現実のきびしさを真正面からとらえ、「協同」でそれらを切り開く思いをもつ仲間が各地に拡がりはじめた。いやそういった新しい仲間

たちだけではなく、私たちは歴史の中で農業協同組合や生活協同組合といった少し先を歩く「協同組合人」とも接しあえている。

それらの力を総合的に高めあう為にも、また21世紀を担える力量を継ぎあわせる為にも、(ネットワークづくり)その実現に欠かせない学習(民主主義をその基本的な行動の原理とした)を私達自身から学び、広げあう事がせまられている。

幸い、協同総合研究所において、協同を志向する構成員にむけたテキストを執筆中と聞く。いやそれをまたずとも、先ごろ出版された『いま、なぜ労働者協同組合なのか』(黒川俊雄著・大月書店)を用いた学習会からでも各地で取りくんでみようではないか。

この仕事を進めようとする時に、大切にしあわなくてはならない相手に「自治体労働者」がある。彼らは、本来一番納得しあえるはずの相手だ。

しかし、今、良心的であればある程、この自治体で働く労働者達は、その事はだれでもない、自分達こそがやらねばならない事、と信じこんでいる。ゆえに時としてこの協同の営みを斜めに見たり改良主義と笑ったりされる事もある。しかしこの事が改良的意義にとどまろうとも、住民が主体となる真の協同活動によって、住民の自治能力を高め、そして権利としての参画者となりうる力をたくわえられる場である事に確信をもちたい。

そして、そういった良心的な労働者とともに学びあえる場をこそあたらしい協同組合がつくりだせたらと願っている。この研究集会にはそういった方々が多く参加していただけるよう心からお願したい。そして、人間発達とともに、地域と人の一生という広い視野から教育・文化の協同の問題をどう位置づけるかを問いあう集会としたい。

とりもなおさず、ICA東京大会のベーク報告の意味することを確かめあう場ともなれば。